

バブルガム・クラッシュ3
メルトダウン

1991年ポリドール
監督 石踊宏
原作・企画・製作 鈴木敏充
キャラクターデザイン 園田健一
脚本 有井絵夢
声の出演 榎原良子 / 立川亮子 /
富沢美智恵 / 平松晶子



たまには日本のアニメも取り上げましょう。

舞台は近未来の東京。人類はブーマという人造人間を作り上げ、肉体労働等の「汚れ仕事」を押しつけていた。だが、クレーダーを企てる悪の組織やマッドサイエンティストたちは、独自の技術で戦闘用ブーマを作成、犯罪事件が横行する。これに対して政府は、ブーマを発明したステイングレイ博士の娘シリア・ステイングレイ以下、プリス・S・アサギリ、ネネ・ロマノーヴァ、リンナ山崎（どうでもいいけど、こいつら何人？ 東京に済んでいるのだから日本人なのだろうけど、二〇三四年の日本はそこまで多国籍社会になっているとは思えない）の四人の美女からなる「ナイト・セーバーズ」を結成、装甲スーツに身を包んだ美女たちとブーマの死闘が繰り広げられる……。

- 3 -

粗筋を説明すれば、こんなところでしょうか。美女だけの戦闘集団は前世紀末からの日本アニメでは珍しくありませんし、人間が作った生命体が人間に反乱を起こすという設定は、「2001年宇宙の旅」を持ち出さずとも、チェコの作家カレル・チャペックの「ロボット」や、シエリー夫人の「フランケンシュタイン」以来の定番です。

正直いって、私はいわゆるアニメ顔が苦手で、声優さんたちの「アニメ演技」にも違和感を覚えます。アニメは、日本が世界に誇りうる数少ない文化の一つだということは認めます。

今回、「バブルガムクラッシュ」を見たのも、仕事のためでした。幾つかのエピソードがありますけど、少年を思わせるブーマと、暴走族あがりらしいプリス・アサギリが最初は敵対しつつ、しだいに友情が芽生えていく「2」などは、ジョン・カサベテス監督の名作「グロリア」（ジーナ・ローランズが素敵！）を思わせる（パクリ？）佳作ですけど、まあ、そんなことはどうでもいい。

- 4 -

おかしかったのは、ナイトセーバーズが強大な戦闘用ブーマと戦うクライマックスです。かたや人造人間、かたや装甲スーツですから、当然、武器はレーザービームや熱光線で、取っ組み合いの格闘にはなりにくいはずですが、ところが、あまりに強力すぎる敵に追い詰められ、押さえつけられたネネ・ロマノーヴァが、思い余って相手の股間（！）を蹴り上げるシーンがあるんです。普通考えれば、人造人間（機械）の股間に、わざわざ設計者が「急所」を設けるはずがない。ブーマ側が蹴られて痛かったかどうかは、画面上では判然としません。顔はマジンガーZみたいなロボット顔なので、当然、表情はまったく変化しませんが、蹴られた直後に眼が光ってレーザーを発射し、ネネを吹き飛ばします。中途半端に股間を蹴られた男が逆上して、かえって女性をボコボコにするという演出なのか、という気もします。

そういえば、主役の女子高生（サラ・ミシェル・グラール）がさかんに急所蹴りを披露して、アメリカのBBフアンの人気を集める「バッファイ／バンパイア・スレイヤー」を見てみると、狼男みたいな化物の股間をバッファイが蹴り上げ、悶絶させるシーンがありました。

一〇年ほど前に韓国を旅行したとき、知り合った韓国女性とホテルでテレビを見ていたら、「靈幻戦士〜キョンシー」を放送していて、女の子がキョンシーの股間を蹴りあげて悶絶させるシーンがあり、彼女は爆笑し、私は「うーん、キョンシーみたいな妖怪でも股間は急所なのか」と驚いたものですが、相手の急所を突くのは、実戦格闘技の定石ですし、その意味じゃ男と戦うだけの自信のある女性は、金蹴りくらいは知っていて当然。

というのは強引すぎる解釈で、たんに女性に金蹴りをさせたい男の妄想がこれらの演出を生んでいるというのが正解なんでしょう。

考えてみれば、物理的に弱者とされる女性が男性を打ち負かしてしまうのは、倒錯的フェティシズムです。

実をいうと世界の歴史には、そんな女性は結構いるんです。いや、別に格闘技の強い女性というわけじゃありません。

フランスを救ったジャンヌ・ダルク。日本でいえば新羅征伐（朝鮮半島侵略？）を指揮したと「日本書紀」が伝える神攻皇后。沖縄やベトナムにも、祖国存亡の危機に女性が立ち上がり、男どもを率いて敵を撃退したという伝説があるそうです。

たとえばジャンヌ・ダルクですけど、彼女は髪の毛を短く切り、男装してフランス軍の先頭に立ったそうです。当時の厳格なキリスト教社会においては、女性の男装は火あぶりに相応しい「罪」でした。

しかしながら、と言いますか、だからこそ、ジャンヌに率いられた男どもは、宗教的ルールを平然と破る女の子の存在に、現在考える以上の倒錯的フェティシズムをかきたてられたのではないのでしょうか。倒錯とは、「良識」や「モラル」に反するところから生まれる「性的興奮」なのですから。

ただし、彼女たちは自ら武器を振るって戦ったわけではない。ジャンヌ・ダルクは「神のお告げ」に従って戦ったのだと主張していますし、神功皇后は、船で朝鮮半島まで進んでいったら魚たちが津波を起こしたので、新羅の王はたまらず降参したわけです。

要するに、彼女らの武器は、その背後にある「神」であったり、巫女としてのカリスマ性でした。しかしながら、現代社会では、女性の巫女的なカリスマ性は理解されづらい。

そこで考え出されたのが「金蹴り」なのではないか。

すなわち「金蹴り」は、古代西洋の「黒魔術」に匹敵する反道徳的行為なのです。